

<p>低魚粉飼料の有効性評価－Ⅱ</p> <p style="text-align: right;">名倉 盾</p> <p>低魚粉飼料(魚粉 30%)と対照区飼料(魚粉 43%)を用いて飼育成績を比較したところ、低魚粉飼料で飼育したニジマスは飼料効率、日間増重率、白血球貪食率が劣り、悪条件下では摂餌率も低下した。その一方で、増肉単価は12.4%安くなり、低魚粉飼料は、成長に時間がかかるものの飼育形態によって有効な飼料と考えられた。</p>	<p>ブドウ搾り滓投与による養殖魚の品質向上試験</p> <p style="text-align: right;">名倉 盾</p> <p>ブドウ搾り滓入り(1%、5%)、ポリフェノール入りの飼料を作成し、ニジマスの飼育試験を行った。その結果、1%区は終了時平均体重、日間増重率、飼料効率、硬直指数の72時間後、筋肉の色、白血球貪食率で、5%区は終了時平均体重、白血球貪食率で、ポリフェノール(KPA-F)区は終了時平均体重、飼料効率、硬直指数の72時間～93時間後、白血球貪食率で、対照区と有意な差が認められた。</p>
<p>イエバエサナギによるニシキゴイ稚魚の成長促進効果</p> <p>芦澤晃彦・坪井潤一・谷沢弘将・青柳敏裕・岡崎巧・高橋一孝</p> <p>飼料へのイエバエサナギ添加による、ニシキゴイ稚魚の成長促進効果を得るための給餌方法について検討を行った。飼料にイエバエサナギを5%添加することで、飼料への嗜好性が向上し、成長促進効果がみられた。イエバエサナギ添加の期間は、収容初期の15日間のみであったが、成長差はおよそ半年後までみられた。</p>	<p>大門ダム貯水池における環境と魚類相について</p> <p>谷沢弘将・岡崎 巧・坪井潤一・芦澤晃彦</p> <p>2012年9月、2013年3月に大門ダム貯水池において水環境と魚類相について調査した。ダム貯水池に備え付けられている曝気装置の影響により、水環境は地点、深度に関係なくほぼ同様であった。生息魚類調査において9種が確認された。大門ダム貯水池付近における在来種はイワナ、アマゴであることから、今回の調査で採捕された種の多くは移入してきた種と考えられた。</p>
<p>富士五湖における漁業実態の解明－Ⅰ ～増殖事業実態調査～</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>遊漁者はほとんどが竿釣りだが、漁業者からは10種類の漁法が確認された。組合員数は最近10年間で、やや減少傾向が2組合、ほぼ変化が無いのが3組合であった。遊漁料収入や増殖努力は、漁協により大きく異なっていた。増殖放流は、その殆どが種苗放流で、効率的な増殖事業のためには、継続的な指導が必要と考えられた。</p>	<p>富士五湖における漁業実態の解明－Ⅱ ～漁業実態調査～</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>山中湖、河口湖、西湖及び精進湖ともワカサギが最も重要な魚種で、特に山中湖の漁獲量は、1,563kg/年と突出して大きかった。利用形態は、自家消費が半数以上を占めたが、山中湖のワカサギでは、29.6%が販売されていた。好きな食べ方では、ヒメマスの鱒味噌など地元特有の食べ方もあった。</p>

<p>富士五湖における漁業実態の解明－Ⅲ ～遊漁実態調査～</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>ボート等利用者の平均漁獲尾数は、山中湖、西湖、精進湖ともワカサギが他魚種に比べ突出して多かった。遊漁者数は、山中湖が 22,666 人と一番多く、そのワカサギ釣獲量は 4,380kg と組合員漁獲量の約 3 倍あった。河口湖で釣獲されたオオクチバスの最大全長は、増加傾向にあったが、20 尾/日以上釣った人は、放流量が減少した平成 17 年以降いなかった。</p>	<p>富士五湖における漁業実態の解明－Ⅳ ～ワカサギ流通実態調査及び全体のまとめ～</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>聞き取りの結果、山中湖村内でワカサギを取り扱う 2 軒の魚屋と 1 軒のコンビニエンスストアが確認された。年間取扱量は多い時で 10～100kg、販売単価は 500～2,000 円/kg であった。購入者は保養所と近隣住民が殆どで、サイズ的には大型のワカサギに対する需要が高かった。山中湖のワカサギは供給を上回る需要があると考えられた。</p>
<p>カワウの食性調査に基づく被害対策の効果検証</p> <p style="text-align: right;">芦澤晃彦・坪井潤一・谷沢弘将</p> <p>下曾根コロニーのカワウの吐き戻しから、餌魚種選好性について調査を行った。2011 年までのデータに 2012 年のデータを追加して、再検討を行った。アユは IRI（餌重要度指数）では 1 位であったが、餌選択係数では 6 魚種中 5 位であった。よって、アユはカワウにとって重要な餌ではあるが、利用しやすい餌ではないことが改めて証明された。</p>	<p>当所産アユの継代数の違いによる釣られやすさの比較－Ⅲ ～F2 vs F7～</p> <p style="text-align: right;">坪井潤一・芦澤晃彦・岡崎 巧</p> <p>当所で 2 世代 (F2 群) および 7 世代継代飼育 (F7 群) された駿河湾産養殖アユについて同数を放流した河川で投網と釣りによる捕獲を行った。投網による捕獲で F2 群が占めた比率は 47% で F7 群と同程度であったが、F2 群のほうが溯上能力が高いことが示唆された。定着した個体の釣られやすさは同程度であった。当センターで飼育された海産系 F2 群は、F7 群と同程度かそれ以上の種苗性を有すると考えられた。</p>
<p>クニマスの生態解明及び増養殖に関する研究 (総合理工学研究機構研究枠)</p> <p style="text-align: right;">青柳敏裕</p> <p>クニマスの保護と活用を図るため、西湖の水環境等の調査及び人工繁殖稚魚の飼育試験を行った。水環境調査の結果、クニマスの産卵環境は低水温、暗環境であった。増殖技術試験により、クニマスのふ化飼育には飼育水の冷却を必要としないことが明らかとなった。クニマス稚魚の外観はヒメマスと類似し外観からの判別は困難であった。</p>	<p>溪流魚の生息環境復元技術の開発 (溪流資源増大技術開発事業：国委)</p> <p style="text-align: right;">大浜秀規</p> <p>成魚の生息場所の造成・復元技術の開発に資するため、既設砂防堰堤のスリット化による環境改善の効果について検討した。スリット化により河床勾配が急になることで淵と石の数が増え、明瞭な滲筋が形成されるなど物理的環境は改善したが、その程度は過去の事例に比べあまり大きくなかった。また、スリット化により、溯上障害は改善されていた。</p>